



大分県 現代俳句協会 会報

第126号

令和4年9月10日

現代俳句歳時記 【野萱草（ノカンゾウ）】

野原や山間に咲く高さ60センチ前後のユリ科の多年草。一重のものが野萱草であり、八重のものは藪萱草と呼ばれる。花は下から順に開き、一日でしおれる。蕾は解熱、葉・根は利尿の薬効がある。

野萱草もつてのほかの恋をして

大石悦子

大会に「田原千暉俳句大賞」制定 第二回の受賞者（大会第一席）に宇佐市の田中英俊さん 種袋あしたへははむ音がする

本年度の大分県現代俳句大会から「田原千暉俳句大賞」が制定されました。これは役員会の提案を第32回総会で可決して制定されたものです。栄えある第一回の受賞者は宇佐市在住の田中英俊さんに決まりました。作品は「種袋あしたへははむ音がする」です。「種袋あしたへははむ音」と生命のリレーを肯定的に形象化したところが多く、の選者に評価されました。詩情も大衆性もあつて田原千暉俳句大賞にふさわしい受賞となりました。

なお種袋の句には「種袋振れば命の音がする」「種袋振ればどこかに祖父の声」「種袋振ればはるかに花のこゑ」……などと類想句が山ほどあります

が、受賞句は「あしたへははむ音」と鮮やかに詩的展開をはかっているので、「問題なし」というのが大会事務局の見解です。俳句という短詩形態は善意・悪意に関係なく類想句がたくさん生まれます。細心の注意をすることは当然ですが、あまり拘泥して萎縮した作品にならないように気をつけましょう。

さて、田原千暉氏は一九九一年の県協会設立に尽力し、初代顧問に就任しました。歩行不能な車椅子俳人ながら「肉体には思想がある」を合言葉に、平和運動と俳句の統一を求めて全国を駆け回りました。花鳥諷詠の俳句が主流だった戦後期に、圧倒的なリアリティを持つて働く者の力強さを詠いあげました。九州における現代俳句の基礎は彼が作ったといつても過言ではありません。

田原千暉の主筆した俳句誌「石」は、金子兜太をはじめ全国に影響を与え続けました。県協会の中にも「石」出身の俳人はたくさんいます。

二〇一〇年度の県現代俳句大会一席の作品「青野隆々田原千暉の車椅子（坂田正晴）」が象徴的です。

二〇一〇年没。享年八十七才。

第32回大分県現代俳句大会 Ⅱ ※受賞作品Ⅱ

※○中の数字は得点

田原千暉俳句大賞(大会一席)

③⑥ 種袋あしたへはずむ音がする

宇佐市 田中 英俊

大分県知事賞

②⑧ 八月や過去を置き去る海の色

富山県 折田祐美子

大分市長賞

②⑥ 蟬時雨父の耳から消えてゆく

国東市 河野 輝暉

大分県現代俳句大会賞

②⑤ ひよどりが来て日だまりを食べ

つくす

大分市 小野みち子

大分県現代俳句協会会長賞

②③ 稲架を解き村人はみな老いてゆく

てゆく

大分市 谷川 彰啓

大分県議会賞

②① 大空に覗かれている夏の窓

大分市 菅 攝子

大分市教育委員会賞

②① 葉牡丹の真中にある羞恥心

豊後大野市 鎌倉真由美

大分市議会賞

②① 大花野ひとりになって脱ぐ喪服

豊後大野市 上田たかし

大分合同新聞社賞

②② フクシマ忌読め地球の心電図

大分市 園田 武子

OBS大分放送賞

①⑨ マスクよりはみだず欠伸春つらら

豊後大野市 岡村 君香

TOSテレビ大分賞

①⑧ 癌の娘の短きメール読む秋夜

大分市 佐藤 優美

OAB大分朝日放送賞

①⑦ これもまた自然解凍日向ぼこ

大分市 安部 嬉子

大会秀逸賞(3名)

①⑥ 啓塾や身の丈ほどの処世術

九重町 竹石 末子

①⑥ 捨て石は捨て石のまま沖縄忌

九重町 幸谷 恵子

①⑤ 花冷えのどかに銃口あるような

竹田市 有村 王志

大会優秀賞(11名)

①④ 窓を開け我が新年を呼び入れる

大分市 足立 鶴男

①④ ふきのとう刻めば母が匂い立つ

国東市 河野 則子

①④ その拳袖に隠して卒業す

豊後大野市 佐藤 珠幸

①③ 六月は虎屋の羊羹厚く切る

豊後大野市 足立 町子

①③ 少年に狂気若葉に触れてより

豊後大野市 足立 攝

①③ 腑に落ちぬ言葉がつもる羽蟻の夜

大分市 田中 充

①③ 風薫る村に沈める余生在り

九重町 甲斐加代子

①② カーテンのすき間から来る立夏

かな

大分市 赤嶺 広史

①② なごり蟬命の声のきこえる

大分市 菅 登貴子

①② いつからかたつた一人の墓参り

別府市 佐々木 玉

①② 靴音の尖る葬列花の雨

豊後高田市 立花 眞由美

大会奨励賞(27名)

①① コロナ禍や生きるつもりのとろろ汁

ろ汁

国東市 立麻 琴路

①① 夏草や墓標互いにもたれ合い

国東市 岸本千鶴子

①① もう少し生きてみようか夏衣

大分市 飯田 幸子

①① 淋しくてもう風船になっている

豊後大野市 稲田久美子

①① テレパシーで語る金魚と才の子

群馬県 千島 宏明

①① ゆらゆらとぶらす思考の烏瓜

国東市 井上 政人

①① 田を守り先祖を守り溝浚ふ

大分市 田代 直之

①① すぐそこに春を感じて落とし蓋

佐伯市 川西 敦子

①① いいわけはすくみ荒野のねじり花

佐伯市 御手洗豊海

①① 鶏頭や心の壁に悪女棲む

さいたま市 関 とし子

①① 亀鳴くや青い地球は何処へと

大分市 森次よう子

①① バーベキューひとつの月が囲まれる

香川県 合田英怜奈

①① 春愁を棄てて解体生家の鍵

大分市 松廣 李子

①① 出棺の合図ふりだす春の雪

大分市 白土 正江

①① ねぎ坊主平和の拳天を突く

大分市 丘 友子

- ⑨ これはもう休むしかない雪だるま
大分市 本田 圭子
- ⑨ 竹皮を脱ぎあしたへと歩き出す
大分市 川西 達子
- ⑨ 背でものを言う反抗期花の冷え
豊後大野市 吉田 素子
- ⑧ 花冷えや体コキコキ古希となる
九重町 甲斐 素純
- ⑧ 桜散る母を納骨百六歳
- 大分市 安森 範明
- ⑧ 戦雲の彼方に昇る春北斗
大分市 坂本 一光
- ⑧ 湯上がりの爪ゆるやかに切る晩夏
大分市 神 慶子
- ⑧ 春耕やいづれは土に還る身ぞ
国東市 高木 礼子
- ⑧ ありがとう母の棺に梅一枝
国東市 糸永ケサヨ
- ⑧ 朝刊にはさまって来る峡の春
九重町 時松由美子
- ⑧ 春つらら幾万柱の暗い海
佐伯市 竹田 英人
- ⑧ 城跡となぜか仲良しおぼろ月
豊後大野市 児玉 利子
- (二人一賞の慣例に倣ったので、複数の受賞作品があった場合も、最上位の一賞のみとしました)

大分県現代俳句協会

連載・俳句講座

〈第3回「定型」について〉

前回(125号)は第24回大分県現代俳句協会賞発表のため中断した「連載・俳句講座」の再開です。今号のテーマは字余り、字足らずの考え方・定型について。当協会是有季定型を旨とする人も、比較的念頭に置く人も、全くこだわらない人も、さまざまな考え方を許容する団体ですが、それだけにどう考えたらよいのかを迷う会員が多いようです。新会員が過半数を占めている状態なのでなおさらです。執筆者には自分の作句姿勢について率直に述べてもらいました。どの論も深い経験と作句姿勢に裏打ちされたものです。全ての論を味わっていただくことを願っています。

(この連載は協会員なら誰でも執筆できます)

内容を凌ぐ言葉のリズム

河野 輝暉

(1) 音楽としての言葉

毎年よ彼岸の入に寒いのは 子規

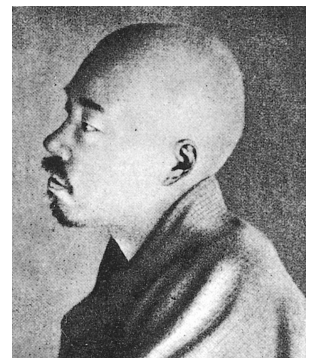
この句は、実は子規の母上が「お彼岸なのに寒いね」とこぼした子への返答だったのである。

「母の詞自ら句になりて」と前書

も、中味より七五調の音楽性故である。

もう七十年の昔、私が子供の頃、冬の寒い闇の道を、多分消防団の一行が次の様に叫んで通っていた。

「マッチ一本火の用心。親爺蹴っても炬燵は蹴るな、火の用心(カチカチと拍子木の音)」子供でも言いたい事ぐらい分かっている。なのに



正岡子規

この老年になっても覚えていて懐かしく思うのは七五調の、そして促音や撥音の混じったリズム故である。現代では「飲むなら乗るな、乗るなら飲むな」の七七調と「の」の頭韻と、反対の意味のうまい対比で効果的。

和歌の世界でも、人口に膾炙している古今和歌集、紀友則作の

「久方の光のどけき春の日に静かなく花の散らむ」がある。こう言っ

ては鑑賞力を疑われようが、作者が言いたい事は凡庸である。この一言は、流れる様に陶醉するリズムでもっているのだと、私は断じている。

音楽性が内容に勝っている。曾てわが師、田原千暉は「リズムは思想なり」と喝破した。

俳句、川柳、和歌、演歌、民謡に至るまで日本語は七五調を快適としている。この手を生かさぬ手はない。世界一短い文芸形式の俳句が五七五

を定型にして安定したのは、法律文とは違って、本能的な帰趨であったと言えるだろう。なおつけ加えておくが、七十二年の奈良時代に編集された「古事記」の中に、日本で最初の和歌とされる、新婚を祝った作品を味読してほしい。

「八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに 八重垣作る その八重垣を」
速須佐之男命の作。

(2) 自由律俳句の心理

俳句の五七五の定型を当然の様に固守して勉強しているうちに、破調を事とする山頭火や放哉、兜太などの俳句に移りがして、己がここに定型に呪縛されて来たことに気づき、迷うことがあるもの。ベートーベンもいいが、時には「さざんかの宿」もカラおけで歌ってみたい様なものだ。修身よりも浮気の方に醍醐味はある様なものだ。

あの定型の大社長、虚子にも有らん事か次の句がある。

凡そ天下に去来程の小さき墓に参りけり

下五は季語と言えなくもないが、その規約は意識したとは思えず、大社長自ら社是である定型、季語に無頓着な自由奔放さに驚く。小生も現

地で参拝したことがある。この句は知っていたし、芭蕉の高弟なのにやつと膝の高さの墓を見つけた不思議を思い出す。

(3) 井泉水と山頭火など

自由律俳人として常に並び称される二人。この二人の師匠は萩原井泉水。少し復習して後学のために資してみよう。

近代俳句は子規を嚆矢(物事のはじめとなること・編集部註)とする。

その革新的方面を河東碧梧桐が継承し、その流れを自由律として提唱したのが井泉水であった。

放哉は東大法科卒で、保険業界にて栄進の道を歩んでいた。しかし飲酒に溺れ対人関係のこと等でうまく行かず「小生の如き正直の馬鹿者は社会と離れて孤独を守るに如かずと決心せしなり」と手紙に書いている。

一方、山頭火は早稲田大中退。出自は造り酒屋で地主階級。母親の井戸への自死のショック。破産を機に捨身懸命の行乞僧へ、妻子を捨ててまでして流転の旅へ。二人の出自冗長に記したが、二人が自由律俳句に走り、いわゆる奇異な俳句形式に身隠れをしつつも、共にエリート學歷を持ち資産家育ちのプライドを解

脱できなかったことが、不定型俳句に走った大きな原因だった。定型を本意とする大多数の俳人とは大違いなキャリアの持ち主であった事を認識しておかねばならない。

次に二人の俳句を見てみよう。

放哉の例句

咳をしても一人

肉がやせてくる太い骨である

山頭火の例句

音はしづれか

鉄鉢の中へも霰

うどん供へて、母よ、わたしもい

ただきまする



種田山頭火

さて、ぜひ紹介したい他の俳人に、

徳島出身の橋本夢道がある。頭はよかったが父に「学校などは六年も行けばいい」と叱られ、藍染めの商社に丁稚奉公に出された。東京に出て偶々図書館で見つけた井泉水の句、君を待たしたよ桜散る中をあるく

夢道は「この句によつて五七五の呪縛から一気に解放される思いがして、俳句にのめり込んでいった」とある。仕事仲間と横須賀へ行った時、

食堂で隣合わせになった美しい女性に夢道は炎を燃やした。逆境と、官憲の目を気にしつつプロレタリア俳句を作った。

夢道の例句

無礼なる妻よ毎日馬鹿げたものを食わしむ

妻よおまえはなぜこんなに可愛いんだらうね

大戦起るこの日のために獄をたまわる

最後に、兜太の俳句について。

兜太は前衛俳句の大明神の様に言われながらも大きくは毀誉褒貶に二分される存在だが、こと俳句の音律については、定型が基本であることを忘れてはならない。兜太は正岡子規国際俳句大賞を受賞した際に挨拶の中で「自由律は作るまい」と言った。

どの作品を見ても「定型基礎的余まり」と思える句ばかり。音読してみるとよく分かる。定型の果てに、進める余情は絶品。小生としては、自由律の束縛から脱し、定型を追究する所存だ。

字余り、字足らずの考え方、定型について

宮川三保子

七音より長くなる作品を「字余り」と言っています。

例として

大学生おおかた貧し雁帰る

中村草田男

俳句は世界で一番短い詩で五・七・五の十七音で、自分自身の心で感じた感動を自身の感性で表現することが大切です。最初の五音を「上五」中の七音を「中七」、最後の五音を「下五」と呼んでいます。

私も初学の頃は定型を守り、歳時記をかたわらに季語を入れて、さらにや・かな・けりなどの切字も手段として使いこなし五・七・五の十七音の定型で作句していました。

俳句は作ってみたいと思う人には誰でも出来るやさしい作業です。

芭蕉は「初心者の句こそたのもしけれ……」と言っています。すなわち初心者の作品こそ感動も純真で清新な作品が多いと述べています。

季語の話になりますが、季語を通して自然の怒りや生命力を知ると同時に日常生活での感動を詠む手立てにもなります。

字余りについて

はじめの内は五・七・五の基本形で作られた方がよいと思いますが十

秋の夜の寒さが押し寄せる本堂での様子を思い浮かべました。上五の「と言ひて」が字足らずですが、僧侶の法話の途中でしようか。いろいろと想像をかきたてることに成功しています。

この様に形にとらわれず、いろいろ作り手によって表現したいことがあれば「字余り」も「字足らず」も容認できるのが私の思いです。しかし一句全体のリズムにも気をつけたいと思います。

俳句は誰のためでもなく自分のために作ると思います。よく素質のある無しを論ずることがありますが誰にでも素質はあります。そして自分の俳句を作ると言うことは人マネではなく自分自身の感動を作品にすると言うことになります。

定型・破調 俳句の可能性

高浜虚子

字足らずについて
例として

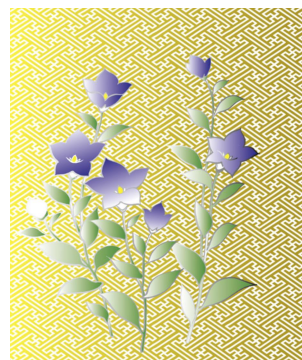
と言ひて鼻かむ僧の夜寒かな

横山 康夫

俳句における定型とは五・七・五の基本形のことですが、現在、俳句形式には定型以外に自由律俳句、多行表記の俳句など、試みられてゐる表現の方法が幾つかあります。ただし、多行表記の俳句の場合は定型の韻律の範疇に収まる作品とさうでな

い作品があり、それは作者によって或いは作品自体によって異なりますから、多行表記を一概に定型外の方法と決めつけることはできません。

発句（俳句）が俳諧の連歌から独立したとき最短詩型となりましたが、それは同時に桎梏（てかせあし）かせ



のこと・編集部註）ともなつたと私は考へてゐます。短いといふことは大きな制約です。自由に心情を述べることはできません。思ひを直接的に表現したい人には不向きな形式と言はざるを得ないものです。俳句を始めた頃「思ひや感情を述べるな。ものや景に託せ」と言はれました。ものや景に託して、あとは読者の想像力に待つといふわけでしょう。しかし、作者としては読者の想像力に待つばかりはあられないので、自己の表現を求めて俳句形式と格闘することになります。

また、最短の定形詩であることによつて類似句・類想句が生まれるのも宿命のやうなものです。最短定型が表現の類似を招くといふ側面もあると思ひます。だからこそ、この短い形式の中で、常に新しい方法が求められるのです。それは他者の作品と紛れぬ方法として求められてゐる

といふことです。

さて、定型といふことの一方で破調といふことがあります。破調といふのは、一句の調子が五・七・五の自然な流れになつてゐない場合を言ひます。ただし、破調と自由律俳句は異なります。「破調」は定型に収まらうとしながらも収まりきれずに微妙に外れてしまったものです。一方、定型から限りなく逸脱して自由にならうとしてゐるのが「自由律」です。

瀧の上に水現れて落ちにけり

後藤夜半

兎も片耳垂るる大暑かな

芥川龍之介

後藤夜半の句は字余りで、芥川龍之介の句は字足らずです。字余りも字足らずも破調の一種と考へてよいものです。この二句は「瀧の上に」が字余りで、「兎も」が字足らずなわけですがこの部分はこれ以外に表現の方法がありません。表現の選択の余地がなく字余り・字足らずになつてゐるのです。つまり破調にせざるを得ない必然性があると言へます。凡そ天下に去来程の小さき墓に参りけり

高浜虚子

ただ見る起き伏し枯野の起き伏し

山口誓子

これらの句は自由律の作品として書かれてゐるわけではありません。これは定型に収まりきれなかつた破調の句です。前者は字数としては思ひ切りはみ出してゐますが、高浜虚子は最後を「参りけり」と五音で止めて定型に収めようとしてゐます。だからこれは自由律ではありません。

山口誓子の句は「八・八」もしくは「四・四・四・四」のリズムで読めますが、このリズムが枯野の起伏を眼前に呼び起こします。字数としては十六音で一字の字足らずですが、これは五・七・五の韻律では却つて捉へきれない景だといふことができます。このやうなリズムにしなればならない必然性があつたのです。破調はこのやうに表現の必然性によるのです。

俳句は短い形式ですが、作品に膨らみをもたせることは可能と考へます。ここに挙げた高浜虚子の句は挨拶句的内容ですが、山口誓子の句は定型に固執しては捉へきれない内容になつてゐることは明白です。破調も場合によつては作品に変化や膨らみを持たせる一方法となる可能性のあることを示してゐます。俳句形式は他の文芸と異なり、作者と読者の双方の作品行為によつて成立する珍

しい文芸です。作者とほぼ同等の力量が読者にも求められます。俳句の優れた読者は大抵の場合俳句の書き手でもあります。作者はさういふ読者の想像力を揺さぶる仕掛けを一句の中に作らねばなりません。一つ例を挙げます。

いっせいに柱の燃ゆる都かな

三橋敏雄

この作品の成立年が一九四五年であることを考へると、当然空襲で燃える東京をイメージします。しかし、この作品はそれだけでは終はりませ

字余り・字足らず・定型について

桐野 力

字余り・字足らずとは、いうまでもなく十七音定型の五音・七音・五音のうち、いずれかの分節の字音数が多かつたり少なかつたり、または全体が十七字以上、あるいはそれ以下になつてゐることである。

一般論でいうと字余りはアウト。なぜかというとな俳句の基本である五・七・五の定型を壊してしまうからである。口承してみるとそれがよく分かる。

しかし、さまざまな表現のテクニックというか技術の一つとして「字余り」「字足らず」「破調」「句またがり」といった形があることも否めない。

これは、定型でも表現できるが作者の意図する思いがフレーズに乗らない、というようないふこともあり、あえて字余り、字足らずを用いるケー



スもあるということである。

したがって、気がついたら字余りだったというのはいただけでない。字余り、字足らずはやはり作者がしかるべき意図を持って用いるであらう手法であり、それなりの経験を積まないは無理が生じるということ。だから、初心者には、意思を持って定型に忠実であるべきだということかも知れない。言い方を変えれば、「字余り」「字足らず」は極めて成功率が低いということでもある。

ここで成功していると言われる作品を探してみた。

上五の字余りは割と多い。

焚き火かなし消えんとすれば育てられ

虚子

虚子の句である。違和感もなくリズムも整っている。

次は、下五の字余り。

さかしまにゐて蟪蛄よこのまま暮るるか

橋本多佳子

下八の字余りという特別な一句。この場合作者の激しい氣息がこういう字余りにしたもので、まさに誰でもできるといえるものではないようである。

問題は中七に字余り。中七は五・七・五の中心にあるフレーズ。すなわち美しいリズムをつくる要でもある。

る。要の七音のゆるみはよほどの決意というか、覚悟みたいなものが必要。上五や下五の字余りの成功例はあるが中七はそうはいかぬというのが大方の俳人説でもある。

ではここで成功例

朝日さす松はむさし野に残る松

水原秋桜子

中八はもとより承知のうえのこと。で字余りを生かし武蔵野の雑木林に残る松、そこに射す初日の莊重感を詠っているという。作者の意図も成功している。

実は、現代俳句におけるリズム・調べの重要さを誰よりも強く説いた

字余りと字足らずについて

有村 王志

俳句は五・七・五の十七文字による音律（リズム）を基本にして、意志、意味、その作者の意図する言葉を使って表現する。しかしどう推敲

のは秋桜子である。そういう先駆者だから、あえて字余りの音数を意識して自らの感動をリズムに乗せようとしたわけで、初心者の推敲不足とはワケが違うということだ。

改めて、秋桜子の字余りの一句である。

薔薇の坂に聞くは浦上の鐘ならすや

なるほどと改めて、納得はするものの、やはり、こういう字余りの句は到底出来そうにない。しかし、勇気を出して、いずれ挑戦してみたいそれが現代俳句を始めた理由のひとつだから。

しても、自分の想いを形象化するにあたり、この枠に嵌らない作品が出来ることがある。それが字余りと字足らずであるが、字余りは沢山の作品を見ることがある。一方、字足らずの作品は少ない。

この変形を余儀なくさせるもの。その原因の一つは口語が俳句の中に盛んに登用されてきたこと。俳句が何の意味を表して、詠む側にどう理解して貰うかということにある。音感を伝える音節と意味を伝える

文節の二つが存在しているということである。以下作品を通して検証してみたい。

牡蠣やかんの十二月八日何思ひし

加藤楸邨

音節では 牡蠣やかんの（五）十二月八日（八）何思ひし（六）となる。文節では牡蠣や（三）に かの以下の十六文字となる。

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

松尾芭蕉

芭蕉が亡くなる元禄七年十月十二日の四日前の最後の作品（五十歳で没）この句 弟子の支考を呼んで「なほかけ廻る夢心」とも考えたがどちらが良いかと尋ねている。支考は芭蕉の病状や季語がないこともあり、そのままではよいのではと答えている。この句は上五が六文字で字余り。この作品に金子兜太は「短詩型の今日の創造」で次のように述べている。

冒頭の五音が偶数の六音に延びる――つまり一字の字余りである。この一字の余情から芭蕉の「旅」の思いを聞く。五音に凝縮させようとしてもできないのだ。それだけに一転して「夢は枯野をかけ廻る」と追い込む。その気分の意志的な立て直し――激流のような事情の吐露――が私に





金子兜太

響く、一字の字余りと言えども、厳しく言えば立派に必然性を持つている。たとえば「旅に病み」と五音に整えた場合は、旅という言葉、病みという言葉は軽くなってしまう。芭蕉が『旅』にかけている思い、その深さが、ここでもそのまま出したかっさに違いない。と述べている。「旅に病んで」と「旅に病み」の一字の違いが作品展開に大きく作用していることが、ここで理解できると思う。

また、俳句特有の言葉、例えば、山装う 山笑う 山眠る といったものや日本語特有の読み方 瞳を目 蚕の眠り（かいこ）を（こ）の眠りと読ませ、紅花にルビをうって「べに」と詠ませるなど十七文字にどう収めようかということに腐心していることなどがある。また

川の音がいちにち木の芽起ししている

沢田改司

この句も川の音を（おと）と読まず

（ネ）と呼んで音律（リズム）で五音に読んで納得するといったこと等が存在する

戦後、社会性俳句、新興俳句、前衛俳句など様々な作品が生まれてきたが、ここで金子兜太編による「現代の俳人」二〇二人（千四年発行）の中から、戦後に活躍した俳人の表題に該当する作品を掲示し各人各様の観賞をして戴きたい。

石の家にぼろんとごつんと冬が来て

高屋窓秋

青年へ愛なき冬木日曇る

佐藤鬼房

凶作の夜ふたりになればひとり匂う

鈴木六林男

一月の川 一月の谷のなか

飯田龍太

雪の日暮れはいくたびも読む文のごとし

飯田龍太

子も手打つ冬夜北国の魚とる歌

古沢太穂

蜂飼いにアカシアいま花日本海

古沢太穂

こぼるこぼると白鳥の夜のこゑ

森 澄男

戦後の空へ青鳥死木の丈に満つ

原子公平

今日何も彼もなにもかも春らしく

稲畑汀子

すきとおるこは太鼓をたたいてとおる

阿部完市

栃木にいろいろ雨のたましいもいたり

阿部完市

がくんと前肢大定型の死へ折る牛

堀 葦男

見えない階段見える肝臓印鑑滲む

堀 葦男

死にがたしとて養虫のあつまり

宮坂静雄

彎曲し火傷し爆心地のマラソン

金子兜太

白い人影はるる田をゆく消えぬために

金子兜太

銀行員ら朝から蛍光す鳥賊のように

金子兜太

百人の各人十五句のなかで「字足らず」は、佐藤鬼房の作品一句のみであった。

このほかに特色のある橋本夢道（萩原井泉水に師事。一時期、層雲に参加、俳句言論弾圧で投獄され、

定型について考える

ぼくは俳句はもつと自由でいいと思っし、自由であるべきだと考えている。文学の他のジャンル、たとえば小説やエッセーがたくさんの新人

戦後は俳句人連盟に参加）の作品を紹介しておきたい。

無礼なる妻よ毎日馬鹿げたものを食わむ

妻よ五年吾と面白かったといひないうけば寒い

石も元旦である

前二句について、後年、金子兜太は俳句は十七文字の最短詩形の観点から、この句群を否定している。

橋本夢道の長文俳句は自由律で人氣を集めた時期もあったが、戦後俳句のプロレタリア文化の過渡期、その一時期の句群という印象で殆ど見なくなった。

参考資料

なぜ芭蕉は崇高の俳人なのか

大輪靖宏 著

短詩形の文学と創造

金子兜太 著

現代の俳人二〇一人

金子兜太 著

足立 攝

がる。その様子は風流というより、ぼくの目にはハロウィンの仮装行列に見えて、何だか哀しい。

○

人類における文学の歴史は長い。現存する世界で一番古い詩は、紀元前3千年の「ギルガメシュ叙事詩」といわれている。人類は5千年前の文明の黎明期には、もう詩を手に入っていたのだ。そして人類最古の小説やエッセーには千年の歴史があること、それに対して俳句の歴史はわずか130年と極端に短いことは、すでにこの講座で書いたとおりである。(会報123号)

この若い俳句が、なぜこんな分不相応なほどの伝統を押しつけられることになったのか。理由はいろいろ考えられるが、全ての原因の背後には、俳句界が閉ざされた世界であったことがあげられるだろう。俳句界は他の文学のように自由な相互交流をせずに、国民の文学であることを拒み続けた。俳句愛好者だけの狭い「ムラ」を作り、ムラだけで通用するさまざまな掟を決め、それがガラバガス化して肥大してきたのだ。こう言っと、とても乱暴に感じる人もいるかも知れない。この点については誤解のないように、後日もつとて

いねいに論を進めたいと思う。不愉快に思う人も多いだろうが、とにかくぼくはそうのように考えている。

○

なにしろ狭いガラバガス諸島である。そこでは正岡子規や高浜虚子：など、たくさんの巨人が作品を発表し、俳句論を語った。狭い世界で



あるので有力な反論者は現れない。季語や切れ、今回のテーマである定型などは、そのほとんどがこの巨人たちが言ったことの繰り返しか、その派生形である。それが今でも後生大事に繰り返されているのだ。

だが考えてみてほしい。確かに巨人たちの言ったことの多くは正鵠を

得ているが、それはその巨人たちが生きていた明治時代のことである。彼らはその時代の開拓者で、時代の最先端を切り開いてきたのだ。時代を切り開くとは、これまでの常識を打ち破ることなので、当時の重鎮や大御所、大家からはさぞかし異端者扱いされ、無視され、妨害されてきたことだろう。

新しい時代を切り開くとはこういうことなのだ。

○

だから彼らが時代の制約の中で残した一字一句を、そのまま経文のように引き

継ぐことは、逆に彼らの意思に背くこと

になるのではないだろうか。真に彼らから受け継ぐべきは、私たちが現状に安住するのではなく、彼らのように時代の開拓者になることではないだろうか。

過去の巨人(たとえば高浜虚子)は、令和の時代には生きていない。彼らが夢想に仕なかつたネットショツ

ピングや空調空間、人生百年時代が私たちにはある。俳句文学を現代を写し出す現代の文学として発展、完成させることは、高浜虚子の仕事ではなく私たちの仕事なのだ。過去が遺した成果に現代の成果を加え、《現代の俳句》として未来に伝えることは、私たち俳句に携わるものの責任ではないだろうか。ぼくは自らもそうありたいと強く願っているし、多くの俳人、俳句をこころざす若い人たちにも、それを期待したいのである。

定型の問題はこの視点から考えなくてはいけない。定型問題は季語と同じように、過去の歴史的必然の中で培われてきた。

日本人が文字を持つ前、つまり大陸から漢字が伝来する前からこの国に「ことば」は存在していた。このことばをざっくり定義して「大和ことば」と呼ぶ。

大和ことばとは、「ほし」「かわ」「おもかげ」「うまずたゆまず」のように、現代の私たちの言葉の根幹をなしているものである。この大和ことばに、大陸から輸入された漢字を当てて「星」「川」「面影」「倦まず弛まず」という表記が生まれた。

大和ことばはその後の飛鳥時代、奈良時代……江戸時代、現代までの道のりの中で失われたものも多いが、無事に生き残ったものが現代の言葉を形づくっているのである。外来語がいかに入ろうと、若者ことばやスラングでいかに変形させられようと、令和の時代の言葉の根幹は間違いなく大和ことばである。永久に大和ことばが日本の言語の中心にあり続けるという保証はないが、今しばらく変わらないことは確かだろう。

○

古代人は生き延びるために自然と格闘して食糧を手に入れた。二手に分かれて獲物を仕留めようとするとき、お互いの意思を伝え合う合図が要る。稲作が伝わればさらに集団で暮らすようになり、コミュニケーションが不可欠になる。複数人が力を合わせる労働の中で、意思を統一するためリズムが生まれてくる。

**飛び出す車は急に止まれない
お土産は無事故でいいのおとさん**

これらの標語が耳に心地いいのは五七五のリズムになっているからだ。二二三拍子だとか三三七拍子と言った拍子も、もとをたどれば大和こと

ばのリズムを基調としている。それはあたかも日本人のDNAに刻まれているかのように、日本人が慣れ親しんだなつかしい調べである。万葉の和歌から、今日の俳句まで、このリズムが刻まれているのは、だから偶然ではない。それは大和ことばのリズムなのである。

漢字はすでに

一世紀には部分的ではあるが日本に伝来した。

日本人は実に巧みにそれを大和ことばに馴染ませた。後にオランダやポルトガルから外来語が入って来ても、それは大和ことばの語彙を豊かにするように咀嚼されて、大和ことばに溶けこんだ。

明治から昭和の中期（戦後）くらいまでの日本語のリズムは、大和ことばのリズム一色といっても間違いではないだろう。

短冊や色紙に筆字書きする、あのお馴染みの俳句のスタイル、「有季定型俳句の普及向上に努め……」

（大分県俳句連盟の事業目的）という場合のその俳句は、この時代にできあがったものなのだ。日本人の耳に限りなく心地いいのは、議論するまでもなく当然だ。

○

現代はICT用語を中心に外来語があふれている時代である。もとも



とコンピュータ用語は西洋発祥の言葉がほとんどで、技術の発展の加速度化とともに、容赦なく日本語の体系に侵入してくる。日本語として成熟する間もなく、次々に新しい言葉が輸入され蓄積されるのだ。大和ことばとは縁もゆかりもない異国の言語体系から生まれた言葉である。

令和に生きる私たちは老いも若きも否応なくこの情報化社会の中で生きるしかない。生きるためには、聞いただけでは意味も分からないような無味乾燥な符合を、自分の言葉として使いこなす以外にないのだ。過去の日本人が自然を無視すれば死が待っていたように、現代人はICT用語を無視すれば生きることができないのである。

異国の言語体系で生まれた言葉を、大和ことばのリズムに完全に乗せることなどは不可能に決まっている。五七五至上主義で、現代人の精神を描ききれはるはずがないのだ。

しかしそれでも、先に述べたように日本は大和ことばの国である。大和ことばが私たちの生活の根幹を成していることは今でも変わらない。ICT時代に生きていくぼくたちは、同時に日本の美しい自然の移ろいの中にも生きていくのだ。

○

ここでぼくたちは大きな岐路に立つことになる。進むべき道の一つは、昭和中期くらいまでの日本の言語体系の中に俳句を閉じこめて、そこで俳句を作り続ける方法である。それは花鳥諷詠しかできないではないか、などとケチな難癖をつけている

のではない。現代の不安も奇立ちも、昭和中期までの感性とそれに見合う言葉があれば、かなりの部分が描けるだろう。俳句はそんなものだと思じて、先人が作った伝統の中から一歩も出ないのも、俳句の方法論のひとつには違いない。残念ながら俳句界はこちらの道が多数派である。

もうひとつの道は、これと全面的に対立するのではない。確かに現代の精神の七、八割方は、先人の遺した俳句の方法論を応用して突破可能であると思う。(二十年後は分らないが)だから「現代俳句協会」は多様な俳句のあり方と共存しているのである。

しかしぼくは残りの二、三割を放棄したくない。社会がどんなに複雑化しても、俳句にはその現代をジャ

ストフィットして形象化していける潜在的な力があると信じている。本来芸術とは現代に開かれているもので、歴史の浅い俳句という文芸形式は、むしろこうしたチャレンジに向いている形式だと思っている。

○

五七五の定型がこれからのように変化するのか、まだ皆目見当もつけないが、チャレンジすれば、いつか俳句は新しいリズムを獲得し、新しい伝統を築いていくだろう。

虚子に帰れではなく虚子の精神を現代に活かす、兜太に帰れではなく兜太を現代に連れてくる、それはこんなことだと信じている。ぼくはそれを担う、一本の葦ならぬ一本のぺん草くらいにはなりたいたいと思っている。

大分合同新聞読者文芸コンクール

本年一月三日付大分合同新聞読者

文芸コンクールの俳句部門で、谷川彰啓当協会顧問の選に、以下の三名が入りましたので紹介します。

【一席】

杵築 下司 正昭

紡ぐ詩は令和の少女沖縄忌

【二席】

大分 安森 範明

母生きる蘭を愛して百六歳

【三席】

大分 菅 攝子

祭笛石段のぼる月明かり



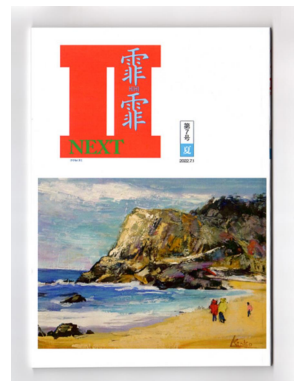
横山 康夫 氏 「周」

横山康夫氏らが編集委員を務める「周」の第5号が出版された。本年5月号。創刊号は2020年の5月で本会報119号で紹介している。

俳句専門家集団を思わせる同人の自選句(各人10句)と作品評、エッセイ、俳論と、バラエティに富んでいる。なかでも出色なのが横山康夫氏の「イメージの重層性について」という論考。超短詩型が故の類似性問題を、重層的なイメージを喚起する仕掛けを中に施すことで突破する方法論である。今号の会報にも横山氏は執筆しており、それと併せて読むとよく分かる。

かなかなと鳴くかなしみの彼方より
逆鱗にふれてこぼる龍の玉
立春の流木明日は沖といふ
花万朶斃るるまでは夢の中

(横山氏作・編集部抄出)



中山 宙虫 氏 「霏霏II」

霏霏IIの会(会長・中山宙虫)は霏霏II夏号を出版した。通算7号になる。俳句を発表する場であるだけでなく、俳句を勉強するためのコンテンツも充実した。その一つが代表である中山宙虫氏の「SO!らん!DO!」のページ。「感銘三句」

「共鳴句たち」で音楠人集(自選集にあたる)からの秀句を選び、宙虫氏が評を書く。注目すべきは「あと一歩考えたい句たち」。宙虫氏自らが問題点を指摘し、解決の方向を添削で示すのである。エッセイも充実していて読み物としても面白い。

伝え損ねた金言白鳥だけはいはる
鳥類へ進化する足葱坊主
歌うたび春の記憶が汚れたす
夕焼けて瓦礫に潜る鳥の影
スマホの中の正義が痛い青みどろ

(宙虫氏作・編集部抄出)

令和四年 第二回雑詠句会 結果発表

【25点】

言い訳をぐいと飲みこむ寒の水

本田 圭子

【20点】

縄跳びの少年風になる途中

本田 圭子

【12点】

相槌をうつ相手なく冷奴

早澤まり子

【10点】

家中の声を掻き込む草の餅

田中 充

立春の光を入れてジャムを煮る

神 慶子

【9点】

制服が光をはじき入学す

佐藤 珠幸

【8点】

銃口に。ペンは勝るや春の雪

足立 攝

戦火呑む入道雲の喉仏

足立 攝

捨てマスクありて枯野はまだこの世

河野 輝暉

【6点】

微笑めばほほえみ返す桜五分

飯田 幸子

廃屋をまた埋めてゆく諸葛菜

幸谷 恵子

春愁を掃いて集めて燃やしをり

倉迫 順子

目的地どこかあるらしなめくじり

岸本千鶴子

春の野や子どもガイドの声弾む

赤峰佐代子

母の日の蕾で届くクレマチス

甲斐 順子

陽炎の父の背中が遠さかる

御手洗豊海

人間を休み長閑や入院す

松廣 李子

若葉泣く砲撃音の日出生台

佐藤 哲夫

【5点】

百年の家より高くこいのぼり

赤嶺 信子

春耕や土ふくよかに匂う時

井上 則子

生れるも死するもさだめ大銀河

御手洗豊海

みどり児の笑顔まぶしき若葉風

御手洗豊海

さくらんぼ上げる子もなく過疎の村

灘波 瑞枝



石蹴って聞く早春の川のおと

谷川 彰啓

蟻が這うドームは今も爆心地

谷川 彰啓

淋しくてもう風船になつてゐる

稲田久美子

花の雲旅立つときは杖捨てて

足立 町子

【4点】

仏壇に自慢の西瓜見てもらう

赤嶺 信子

宿坊の御仏と寝る夏布団

田代 直之

色を足す画家のパレット春が来る

油布 晃

ハンカチに悲喜こもこもを折りたたむ

立麻 琴路

記憶力妻の勝ちです春うらら

永松左世美

白梅の幹の愁いを数えけり

菅 攝子

味噌の濃き漁港の朝餉合飲の花

園田 武子

庭下駄をつっかけて聞く初音かな

井元 扇岳

またひとつ歳をかさねて花は葉に

西峯 峰子

麻酔覚め春はあけぼの賜りぬ

松廣 李子

方言をまる出しにする立夏かな

河野 泉

我もまた宇宙のひとつ大ふぐり

福田 英子

告げもせず告げられもせず花菜道

吉田 素子

菜の花の隙間に伊方發電所

稲田久美子

落書きを砂に残して春逝けり

足立 鶴男

【3点】

桜散る窓や抜歯のうがい水

河野 則子

無常とは美しきかな花吹雪

河野 則子

銅像を柔らかくして八重桜

安森 範明

茎立ちや戦火の中で産まれし子

白土 正江

春愁や溜息ばかり父に似て

上田たかし

秋晴れや旅行かばんを捨てに行く

赤嶺 信子

青き星^{いかり}憤り哀しみ飛花落花

林 香澄

手編み物ばかりの遺品昭和の日

有村 王志

あつさりと裸木でいる齡かな

有村 王志

夏場所を父に奮発溜席

田代 直之

診察の無口な先や冬怒涛

立麻 琴路

啓塾や昭和を点す義母の帯

菅 攝子

のどけしや余さず使う鋏の音

菅 攝子

水ぬるむ少しきつめの名古屋^{なご}帯

時松由美子

八月を支え切れない仁王かな

岸本千鶴子

おとしぶみ封をきられぬまま遺品

伊藤 利恵

ウクライナ空が泣いてる春の雨

畑 正彦

頬なでる風はみどりに蔵摘む

井上 則子

自転車の補助輪外す花ミモザ

佐々木 玉

巢燕に脈はひ託すシャッター街

西峯 峰子

四月来ぬ吾子あし部屋の広きかな

西峯 峰子

八月の空鶴を折る葉包紙

宮川三保子

ひっそりと春を動かす大吊橋

谷川 彰啓

花おわる樹にやわらかき乳房かな

河野 泉

リレーエッセイ 連載 ⑨

「私と俳句」 稲田久美子

轉を抱いた小枝を生けてみる

佐藤 珠幸

筍が皿が立派でかしこまる

児玉 利子

更衣して二の腕をあざとくす

足立 町子

杖を置き青葉若葉の中をゆく

飯田 幸子



私と俳句の出会いには18歳の小豆島でのことだった。地元の高校を卒業した私は、先生の勧めで小豆島の大学に進学し服飾を学んだ。小規模な

キャンパスであるが、空気が海もきれいで映画に出てくる南の楽園の気分が味わえた。服飾の授業は私にとっては新鮮で、楽しいものであった。新しい生地だけが持つ指に張り付くような感触、あのドレープ性がたまらなく好きだと思えた。

当時の学長は「女性にも文学の教養を」が持論の方で俳句にも深い造詣があった。そのせいなのだろうか、学校の主な行事には式典の他にファッションショーや俳句大会があつて、それらの行事に度々俳人の稲畑汀子さんが来賓として参列していた。ときには稲畑汀子さんの講演や俳句教室もあつたように思う。学校の発行

する会報のようなものがあり、その中に俳句のページがあった。これに投句することが勧められていて、私の俳句も何度か載ったことがある。

また同じ頃、大学の友人に誘われて茶道教室に通ったこともある。先生は八十歳くらいのおばあさんで、点前にはいろいろな種類があること、お茶のお菓子が思いのほか上品で美味しかったこと、茶道の中にきちんと食事の位置づけられていることなどに漠然と感心した。しかし、何しろ四十年も前のことであるので記憶が確かではない。

後にこの茶道と俳句が私の人生に大きな影響を与えるものになるとは思ってもいなかった。

次に私が俳句に出会ったのはこれからしばらくたった二〇〇九年のことである。わが家の隣に足立町子さん夫婦が、親の介護のために帰っていた。隣保班であるので子どもの頃から町子さんとは馴染みがあったし、とりわけ町子さんの妹のまゆみさんとは年齢も近いので仲よくしていた。町子さん姉妹がいなくなつてからもお母さんとは何かと気が合い、よく会話する関係である。ある日いつものように町子さん宅にお邪魔すると、町子さんから「久美さん、俳句をやっ

てみない？」といきなり誘われた。

その頃私は、あの小豆島で出会った茶道に本格的に取り組み、自宅には簡易な茶室を作つてお弟子さんを持つようになつていた。茶道の奥深さと面白さを全身で実感し、生涯をかけて茶道を追及したいと思つてい



た。茶道の基本は七事式に規定されていて、その応用形に唱和之式がある。その中で短歌や俳句の教養が必要とされるのだ。私は町子さんの誘いを、お茶に役立つから、という理由で受け入れることにした。

町子さんと攝さんのご夫婦が俳句で多方面に活動していたことは知っ

ていたが、地元では狩野句会に属しているという。まず狩野句会に来てみてよと言うので、攝さんの特訓を受けて句会提出の七句をこしらえた。

亡き母をまん中に置く盆踊り
小走りの影に怯える居待月
裏口を開ければ高まる虫の夜

今読み返すと汗顔の至りだが、自然や風流だけでなく私の等身大の思いを表現できる俳句に次第に関心が深まっていた。

仕事やお茶事で行けないこともあるが、狩野句会にはすぐ馴染むことができた。会長の上田たかしさんは穏やかな人格者で全員を平等に温かい目で包んでいる。あとから県下でも有名な俳句の先生だということを知った。威張ったところが全くなくて何でもやさしく教えてくれる。

参加している人は年配のご婦人が多いが一樣に上品で、司会の攝さんの質問にもきちんと自分の意見を述べる。その意見が教養に裏打ちされているように感じて、これまで私が出会った人たちとはまた違った種類の人だと思った。みんな新参者の私を温かく迎えてくれた。

俳句はどんな思いでも表現することができるとが、あまりにも短いので思いを説明する言葉が入らない。何かを入れようとすると何かを削らなければならぬ。そうやって考えていくうちに、最初の思いがはつきりしていないからの確な表現ができなからだと気付いた。俳句をすることは、自分自身を見直すことと一緒だと思つたとき、これは茶道の精神も同じだということに気がついた。

お茶席の黒子で通す野紺菊
蛇穴を出て子どもに囲まれる
田植えて畦まで遠き左足

気がつけば俳句を始めて十三年。見よう見まねでやって来たが、全身全霊で取り組んできたとはとても言えない。狩野句会も私の後輩がふえてきて、とうとう過半数を越えた。思いがけずに、今回の県現代俳句協会賞の準賞もいただいた。もう新人と甘えているわけにはいかない。

私を指導してくれた上田たかしさん、町子さんご夫妻、狩野句会の素晴らしい仲間たちに感謝を申し上げるとともに、早く一人前に成長できるように、勉強を重ねていきたい。

第32回大分県現代俳句大会について

昨年の成功を踏まえて、第32回現代俳句大会はあと一步の大衆化を図ることが要求された。この大会の成功は、「現代俳句」がより多くの市民権を得ることと同義である。広く会員外にこの大会を告知する手段は、今のところ新聞等の広告しかない。またこの大会は営利を目的としてい

ないので、今回は思いきって広告費を増額した。
左の広告が締切間際に朝日新聞地方版のテレビ欄に載せたカラーの告知である。昨年以来の人間関係ができていたのでモノクロと同額の3万5千で掲載できた。ほかに地方情報

誌の月刊セーノ！にカラー半ページで3万6千円で載せてもらった。こちらは一日限りの新聞と違い、読み物として雑誌が一定期間保存されることを考慮した。この二点が昨年より増えた分である。合同新聞の「ぶんぶん」さんの三回、朝日新聞の一

回は昨年通りである。
合計632句の応募があり（昨対113%）31万6千円の投句料を得た。一人でも多い俳句愛好者を顕彰したいという思いからこうした大会では異例の53名を入賞とした。（入賞率8・4%・ちなみに直近の現代俳句長崎大会では入賞率3・2%）紙代等が非常に高騰して経費を切迫するので、近場の入賞者には手渡しをするなどの対策をしている。



俳句は古いものだと思っていませんか？
俳句は「俳句の形式で書かれた現代の詩」です。日常生活の中で生じる小さな感動心の揺らぎ（正の感情だけでなく、嫉妬や苛立ちのような負の感情も含みます）を現代の感覚で作品にしてください。
今年は昨年に続き紙上大会としました。老若男女、俳句が好きなた方が対象です。会員、会員外を問いません。ふるって応募ください。

第32回 大分県 現代俳句大会 作品募集

昨年度受賞作品

- 大会大賞／大分市・谷川彰啓 「牡蠣する指の先まで日本海」
 - 大分県知事賞／豊後大野市・足立 攝 「飛花落花どこへも行かぬ父の靴」
 - 大分市長賞／国東市・河野輝暉 「ダム底に捨て墓いくつ鳥渡る」
- ほか入賞は全部で35句

【投句先】〒879-7151

豊後大野市三重町西泉436 足立攝方協会事務局

【投句料】2句1組千円。複数口の投句を歓迎します。
投句作品に同梱ください（小為替可）

【選考】大分県現代俳句協会大会選者・投句者（希望者）

あなたの作品を見て、
大会の特別選者が
アドバイスのコメントをします
（2組以上投句の希望者のみ）

今回の特典として、あなたの作品の良い点、注意する点をアドバイスします。基本的に一句の指摘になりますが、それが添削か、コメントか、その両方になるかは選者によって異なります。
希望者数によっては時間がかわることがあります。（再質問可）



全員に全応募作品が載った冊子を差し上げます。
現代の俳句の傾向が一目で分かり勉強になります。

請求下されば投句用紙を郵送いたします。
原稿用紙等を使用されてもかまいません。
また、大分県現代俳句協会のホームページより投句用紙をダウンロードできます。

<http://www.gendaihaiku.net> こちらの二次元バーコードからどうぞ



お問い合わせ先

大分県現代俳句協会事務局
【足立まで（携帯 090-8413-3139）】

FAX兼用 0974-22-3749 oita@gendaihaiku.net

【主催】大分県現代俳句協会

【後援】大分県 大分市 大分市教育委員会 大分県議会 大分市議会 大分合同新聞社 NHK大分放送局
OBS大分放送 TOSテレビ大分 OAB大分朝日放送

《新会員紹介》

加納 知子(福岡県)

早星あなたの元本割れてます

安部ユリ子(国東)

「ひまわり」にローレン遙がウクライナ

中村 廣光(大分)

葱坊主凜と天突き輝けり

《逝去謹悼》

井上 治

(5月26日逝去・享年86歳)

河野 泉

(9月1日逝去・享年89歳)

《退会》

嶋末洋子(8月31日付け)

《発展基金協力者》

※一口千円で受付中

(前号の続き)

・福田 英子……………三口
・本田 圭子……………二口
・宮川三保子……………三口
・森山 秀子……………一口
・安森 範明……………三口
・白土 正江……………三口
・溝部 文夫……………三口
・竹田 英人……………八口
・時松由美子……………二口
・甲斐加代子……………八口

・甲斐 素純……………五口
・原田 勝子……………三口
(会員外)

・山本 悦子……………二口
・夢野はる香……………二口
※たくさんのご協力をありがとうございます
ございました。

句会探訪 ⑬

高原句会誕生お祝い会

九重町は江戸時代には松尾芭蕉の高弟のひとりである長野馬貞を輩出し、この菩提を弔ってきた麻生良昭氏(故人)によって「長野馬貞顕彰俳句大会」が地域に根付いてきた。また当協会員で百一歳で亡くなられた駒走松恵氏が、地域の「さくら草句会」を指導してきた。「アジサイ祭俳句大会」を昨年まで開催した宝八幡宮司の甲斐素純氏(当協会員)、広報



また九重は俳句誌「天籟通信」を創設した穴井太(故人)の生誕の地でもある。当協会でも天籟通信会員は現在十数名を数えて最大の勢力である。穴井太から直接指導を受けた老舗旅館宝珠屋の大家将である甲斐加代子氏が代表を務める「高原句会」も全員が県協会員である。

6月7、8日の両日、甲斐加代子氏の米寿の誕生日を祝うため、高原句会の全員が宝珠屋に宿泊し、宿の従業員から送られたケーキを前に乾杯した。また夜には5時間近くの句会を開いて親睦を深めた。(この欄の記事を募集中です)

令和四年度 自薦作品募集

・ハガキ、メール、FAX等で事務局に自作の4句を送ってください。
・締切は10月31日(消印有効)
・年二回の雑詠句会と、この自薦作品が年間一句賞の対象になります。
・投句用紙は同梱していません。

《編集後記》

◆連載・俳句講座の三回目、定型についての特集はいかがでしたか。各氏各様の実践から生まれた論です。
◆多様な考え方を許容し、学び合い影響を受けあうのが当協会の発足時からの文化です。
◇広く全報の記事を募集しています。

令和四年九月十日発行
会報第百二十六号
発行人・有村 王志
発行所・大分県現代俳句協会
編集人・足立 攝



大分県現代俳句協会

OITA-KEN GENDAI HAIKU ASSOCIATION

会長 有村 王志

《事務局》

〒879-7151 大分県豊後大野市三重町西泉436

足立 攝 方

TEL.&FAX. 0974-22-3749 郵便振替 01900-5-57481

URL:http://gendaihaiku.net

E-Mail: info@gendaihaiku.net

